

パネリスト（松島勇雄 氏）

はい、広島商船高等専門学校の松島でございます。先ほどらいのパネリストの方とはだいぶ違ひまして、身内でありこの島に住んでいるものでもあり、すごくつながりという関わりが深いので、どんな話をしたらいいのかよくわからないのですけれども、まずどうしても商船学校の宣伝をしていかないといけないのかなというふうに思っております。

まず、私はこの海と船のシンポジウム、商船学校にいるのだから当然関わりがあるだろうというぐらいのものよりもう少し関連が深いものがあります。私の実家は、先ほど佐田尾さんのまきはだ船というのがございましたが、あれよりもうちょっと大きいですかね、おぼろげながらですが、その船に幼稚園に上るまでずっと船で生活をしておりました。まさに船乗りの英才教育を受けたんだなというふうに思うのです。それは家業が先ほど来ありましたように、この島は造船そして船泊に来ての商いですかね。それからだんだんみかんの方に移ってきたというところもあるかもしれませんが、そういう底流の中にはっきりいって出稼ぎ、先ほど瀬戸内海のところにもありましたが、結婚適齢期の男性が非常に少ない。それを支援しているのが商船学校というネガティブなものではなく、言い方は悪ければ勘弁してもらいたいのですが、昔、甲種・乙種免許というものがあり、上級船員という言い方をしていたのです。今は一から番号をふってよく分からないという状況であります。それこそ将来外国航路の船長、機関長になるだろうというふうな先輩をたくさん輩出し、そしてこの島にたくさんのお金を送ってきていただいたことがすべてではないのですが、それがこの島が豊に鷹揚で気候風土も温暖でまったりとしておりますが、生活水準もそれなりに維持できたのも、一つは商船学校があり、その卒業生が世界の海をまたにかけ一生懸命に日本のためにやってくれたということが貢献しているのではないかと思っております。

一つは權伝馬ということが私にはありまして、先ほど外にも權伝馬はありますし、絵にも出てきましたし、中学生の発表の中にも權伝馬という形で、やはりこの島の文化伝統という意味でははずせない。その延長に船乗りというのがあるのだと。

商船学校というのは、私も商船学校を出ましたけれども、たしかに電子計器とかいろいろな複雑な機械とかありました。しかしそれを利用する技術を船乗りは習得するわけです。これを技能というとなんか薄っぺらになるので言いたくはないのですが、そういう技術を、ここが1番言いたいのですが自然が相手なのです。自然をどういうふう知り、自然に対してどういうふう立ち向かうかという方法ですね。それをして予想通りの結果を導くかということが商船学科、航海科には必要なのです。我々はそういう教育を受けたと思っております。というのは、五年半の教育の四年半はトータル一週間強練習船でトレーニングをするのですが、四年半のあとの外国航路、全部が全部ではありませんが、遠洋航海をします。その中で一番今でも印象に残っているのは、船は当然二十四時間動くわけですから、誰かがいないといけません。練習船でなおかつ帆船なので、これを動かす小さいエンジンがありますが、帆船というのは風を見、潮を見てそして帆の向きを変えて目的のところへ

行くという技なのです。やはり相手は自然です。どういうふうにご利用するかどこまで譲歩してどこまで自分の意思を出せるか。今でいうトレードオフのような中で学生ながら勉強させていただきました。一見、遊んでいるように見えるのですが、それが私は物すごく自分の船に乗るといものにしる、また拵がって品厳として成長していくのに非常に重要なものをいただいたというふうに思っております。だけど最近、生徒さんがいなくて。ここは船員の町ですから、皆さんよくご存知だと思うのですが、船員さんが少ない。内航船員が非常に危機的な状況にあるということを聞いております。うちも兄が船員をやっておりますので、それはひしひしとわかるのです。そういう中で自然豊かなこの大崎上島、またこういう状況にあるところはたくさんあると思うのです。日本津々浦々。だけどそれはもう限界的な状況になってきている。私が思うのは、もっととんでしまうのですけれども、自然体験を十分する子どもたち、若者たちが。そういうふうな育成課程が必要なのかなと。その先にいろんなものを消化していく、巾を広げていく感覚が育つのではないかと思っております。

コーディネーター（谷川正芳 氏）

時間に配慮いただき、まことにありがとうございます。今、自然が相手ということで、島ならではの、ということであろうと思います。

本来であればもう 1 回ご意見をいただきながらということなのですが、時間が延長するだろうということで最初、お断りしておいてよかったと思っておりますが、そのかわり最後にまとめるにあたってそれぞれのパネリストの先生からひと言ずつという意味で、まさにパネリストの先生なのでパネルにひと言ずつ言葉を書いております。すみません。もう少し時間をとりながらと思っていたのですけれども、お手元に画用紙を配らせていただいております。そこにそれぞれ四名の先生方、申しわけございませんけれども大崎上島に対してという意味も含めて、大切なことということでキーワードを書きいただけたらと思います。

じゃ、先ほどご発表いただいた順番にパネルを前に立てていただきながらひと言ずつお願いできればと思います。